◎水仙の花

岩代服部てい子

む。

さはれ、われにはゆるさせ給へ、父が遺品の軍帽に、かざすべけれ

母君は今、柴折りて、竈の前にかゞみ給ひぬ。われは米とぎにと、背戸

の清水

ば・・・・・・。ぬれ手のまゝにとりあぐれば、さてもゆかしの香りなるか

な。

いつ來ても、にごりなきは、此淸水かな。いつ見ても淸きは、此の淸水

後れ毛かき上げ、一我ツ家ふりかへれば、母の焚きます竈の煙り、細う

なるかな。あゝ、父が戰死せられしより、此の里に移りきて、早や七ケ

っケ ……白う……。

得堪へで、こゝに、この淸水のもとに、走りきて、我が泣顔うつしたり月。その一日一日と、父君を思ひて、母君の己れにかくす一雫見ては、

よ。うつしてよ、その靑をと、かをこ対かってこりした。か、召撃り

しよ。うつしては、その清きさゝやきに慰められたりしよ。あゝ名譽の

戰死。父は名譽の戰死なり。君の御爲め死せしなり。されど、あゝ、今

更に米とぐ手の、たゆたはるゝかな。思はじとすれど、生憎に、頰を傳

はるその一滴、澄みたる水に輪をかきて、やがて、大きう、大きう……

・・・・。うるめる眼に、その餘波を見おくれば、あな!岩に碎けて、輪は

消えたれど、そこには露の園生の女神の如く清くやさしき水仙の花。

わづかに殘れる白雪を褥に、今し苔をすべれる一雫に、ゆら~~と水を

のぞきぬ。きのふまで、見出でざりしは、そよ、神の守 り ましゝなら

【入力者注】原文にあった傍点は省略しました。

原文と行を合わせるために、

半角スペースを挿入した箇所があります。

底本:「女子文壇」第四號 明治三十八(1905)年

入力:小林 徹

7

公開:令和三年四月十日

修正:令和六年四月十一日

リンク:水野仙子ホームページ